

## 大学のグローバル化を牽引する職員を目指して ～教育の質的転換のために～

2015年9月4日（金） 13:00～17:00

法政大学 市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 4階 S406 教室

### 開会の挨拶

佐藤 良一

（法政大学 教育支援本部担当常務理事）

こんにちは、みなさん。ワークショップにお越しいただきありがとうございます。

スピーチをする機会を頂き大変うれしく思っています。このワークショップの目的が、グローバル化の時代における、大学職員の役割について考えるためのものだと理解しております。そのカギとなる2名の講演者をお招きしています。鮑さんとLoiさんです。鮑さんは広告社株式会社の北京事務所に在籍しておられ、Loiさんはハノイ国家大学外国語大学の元講師でいらっしゃいます。お二人が我々に有益な情報を与えてくださると思っております。お話いただく話題は、中国とベトナムの大学におけるグローバル化の様相の紹介となります。講演に移る前に、私から皆さんにいくつかアイデアを差し上げたいと思います。

「Think Different」についてお話したいと思います。「Think Different」はご存じのようにアップル社の広告のスローガン、キャッチコピーになっていますが、これから話す内容は「考え方」についてです。紙とペンか鉛筆をご用意ください。紙にこのように9つの点を描いてください。書きましたか？では、まず、課題の一つ目は、「9つの点をすべて通ること」、二つ目は「4つの直線だけを使うこと」、三つ目は「一筆描きにすること」です。さあ、やってみましょう。皆さんに考える時間を30秒差し

上げます。答えを既にご存じの方もおられるかと思いますが、答えを言わないで黙っていただきますね。できましたか？ではスライドをご覧ください。この答えは一つ目の条件を満たしていません。なので、正解ではありません。皆さんが思いつくだろういくつかの解答例がここにあります。最初の3つはいずれも一つ目の条件を満たしていません。最後の解答例は二つ目の条件を満たしていません。これは真っ直ぐな線になっていませんね。そして、これが正しい解答になります。ここがスタートポイントで、1、2、3、4と線がすべての点を通っています。もし、3つの線だけなら、どのように答えを導きだしましょうか。答えをお教えしましょう。これで1、2、3と3つの線がすべての点を通っています。さて、皆さん、今、どう感じていますか？このクイズから学べることは、私達は今までの物の見方とは「違う考え方（Think Different）」をしなければならないということです。「9つの点」の課題では、解答を導くために、箱から抜け出した考え方をしなければいけないということがわかります。「Out of The Box Thinking」です。わかりますか？答えを導き出すために、思考の限界まで考えなければなりません。今までの慣れた思考パターンを壊さなければならぬのです。そのためには自由にならなければなりません。結論を述べますが、ここから日本語に切り替えます。

### 創造的破壊

今、四角が上から落ちてきました。この四角

は、一応、私——誰でもいいのですが、みんなさんは自分自身だと思ってください——、それを制約しているBOXがあります。我々は常に自由に考えているつもりではいるけれども、知らず知らずの間に自分を制約しているものを持ち続けていることがあると思います。

途中で言いましたように、我々は、我々自身のway of thinkingを壊さなければいけないのです。その時に、ただ、destroyするだけではなくて、innovative、創造的破壊——創造的破壊という言葉聞いたときに、経済学部の学生であれば、常に名前を思い浮かべる経済学者がいるはず。そうです、シュンペーターです。シュンペーターが資本主義の動向を見据えるときに、そのキーワードとしてあげたものが、創造的破壊ということでした。これをみんなの、これからのさまざまについて考えるときの一つのキーワードにして欲しいと思います。

### 包括的思考と分析的思考

今、スクリーン上に3枚の写真を映しました。「バナナとサルとパンダ」です。“結びつきの深いものを2つ選びなさい”という「サルとバナナ」ですか。「サルとパンダ」ですか。「サルとバナナ」が3人で、「サルとパンダ」が1人でした。同じように、「草、ニワトリ、牛」といったときに、先ほど「サルとバナナ」と答えた人は、おそらくこれを見せられた時に「牛と草」と頭の中が動いていませんか。

今、何をやったかというところ、 “2つの結びつきの違うものを選びましょう” というものです。最初の問いに対して、「パンダとサル」、こちらについては「牛とニワトリ」と答えた人と、「サルとバナナ」「牛と草」、と答えた人がいます。これは有名な話で、二つの思考パターンがあるということです。これは私がオリジナルで考えたのではなくて、こういうことを言う有名な先生がいます。一つが holistic mode of thought、包括的思考とよばれているもの、もう一つが analytic mode of thought、分析的思

考とよばれているものです。そのキーワードは、relationship（関係）、あるいは、classification（分類）です。関係というのは、「サルとバナナ」という関係に着目するという考え方で、「サルとバナナ」と答えた人は、2枚目の絵においては、「牛と草」と答えないと首尾一貫しないのです。最初に「サルとパンダ」と答えた人は、当然2枚目では「牛とニワトリ」と答えます。つまり、分類するときに、動物と動物、が同じものであるという思考方法、それが分析的思考方法です。それに対して、関係や状況に応じて、それらの結びつきが決まっているという思考法をとる人が holistic mode of thought ということです。概して、アジア系の人たちというのは、上の「関係」、「サル」と言えば「バナナ」という思考法をとる人が多いと言われています。

### グローバルとは

それで、今日のワークショップのキーワードが「グローバル化」ないしは、「グローバリゼーション」ということです。

今日のハンドアウトには、「グローバル化＝英語化」、あるいは、「アメリカナイゼーション」というふうに考えるかどうか。Yes or No ということで、今は、Yesと言われている雰囲気があるのです。つまり、学生が特にそうですが、TOEICやTOEFLの試験を受けて何点取らなければいけないというように、いわば強迫観念を持たされていることがあります。それは確かに、一端ではあるけれども、全てかということ、そうではないということです。だから、完全にどちらが正しいということではないと私自身は考えています。とすると、どう考えるのか。Yesもあるとすると、正確な言い方をすれば、Conditional Yesとか、Conditional Noという、条件付きYesとか、Noです。では、“条件とはなんなのか”ということが、恐らく今日の、これからのグループディスカッションでも焦点になってくるだろうと考えています。

言葉として、グローバルという言葉を使う、その時のグローバルは、ローカルに対してのグローバルという言い方をする、それは、先ほどの「グローバル化＝英語化」に近いような発想方法だけれども、果たしてそういう発想方法でいいのかどうかということです。

ほんのしばらく前までは、グローバルと言わずに、インターナショナル、国際的、あるいは、国際化というように言っていたのです。いつの間にか、国際化という言葉は消えて、グローバル化というように言い方が変わってきたのです。それも、英語化の波がどんどん強くなるということの一つの反映だろうと考えています。

それに対して、ローカルとグローバルを対峙させるという発想法ではなくて、もう少し別のもの、それはなにかというと、ユニバーサルということを使った方が、より正確な事柄を把握することになるのではないかとということです。

ある本の引用をこれから紹介します。これはつい最近出た本で、『ポスト資本主義』といって広井さんが書いた本ですが、この一節が気に入ったのでみなさんにご紹介します。

「世界をマクドナルド的に均質化していくような方向——これはつまり、「グローバル化＝英語化」で考えるような方向です——が「グローバル」なのではなく、むしろ地球上のそれぞれの地域のもつ個性や風土的・文化的多様性に一次的な関心を向けながら、そうした多様性が生成する構造そのものを理解し、その全体を俯瞰的に把握していくことが本来の「グローバル」であるはずだ。」

ということです。つまり、ローカルと対されるべきは、グローバルではなく、ユニバーサルです。ユニバーサルというときに、年齢であったり、性別であったり、様々なものが、いろいろなことに決め手になるのではなくて、普遍的な価値を持つようなものをローカルに対して、対峙させる。それらを具体的に実現させる場が地球だということです。このように、グローバル化、あるいはインターナショナル化、あるいはユニバーサル、ローカルという言葉の意味を今一度考えることが、結局みなさんがこれから大学の中で仕事をしていくときの一つの重要な視座を与えるのではないかと考えています。

## Innovative Destruction——Globalization

今日の、当初10分の予定が初めから長くなると言っていたので、もっとと言っても限界に近づいているかもしれませんが、言っておきたいことは、思考枠、つまりway of thinkingです。自分が当然だと思っている思考枠が知らず知らずのうちにある、それを破壊する。どう破壊するかというのが、キーワード、今日のワークショップの場合であれば「グローバリゼーション」であるかもしれません。その上で、単に壊すだけなら、誰でもできる。それはinnovativeということです。破壊したうえで、新たなアイデンティティを創造するというのが、今、我々に求められているのではないかとということです。

今日、最初にこの挨拶を私は、かなりbrokenな英語で始めました。みなさん、聞いたときに、「何始めたんだ？」と思ったはずです。そこに違和感を感じたはずです。それは当然です。ここにいるのは、法政大学の職員さんですから、外国の方もいらっしゃいますが、基本的には日本語で仕事している関係の中で、「なぜ英語喋らないとならないんだ」と思ったはずです。でも、その違和感を今は持ちながらも、様々をやり続けなければいけない環境に我々はいるとということです。

ですから、「グローバル化＝英語化」ではないけれども、それに対して、一定の用意というものやはりしておかなければいけないということです。十分条件ではないけれども、弱い意味での必要条件として、やはり自分で鍛錬することが今、必要なのではないかと考えています。そのようなメッセージを込めて、最初いい加減な英語で喋りましたが、そのようなこ

とも考えながら、これからの大学における仕事をしてもらったらいと思います。

今日、これから二つのレクチャーを受けますが、そのレクチャーを受けた後での、ディスカッションにおいて、それぞれが果たすべき役割はどのようなものなのかをそれぞれの守備範囲に即して、今日の時間の中でいろいろ考えてもらえればいいと思っています。

これで、私のご挨拶という名前のトークは終わることにします。ありがとうございました。

## 司会

佐藤常務理事、ありがとうございました。続きまして基調講演「グローバル化するアジアの大学 中国・ベトナム」に移ります。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、学務部では、今年5月からSGU研究会と題しましてアジア各国の高等教育の事情について、知識を深める企画を行っています。これまでに、韓国、オーストラリア、インドを取り上げてきました。

今回の基調講演ですが、この一環として、中国とベトナムをご紹介します。この両国とも、学務部や入学センターが重点を置いている国です。今日出席の近藤部長も、明日朝からベトナムに行かれます。また、この8月は日本とアジアの青少年の交流事業である「さくらサイエンス」というものがあります。こちらの事業で、ベトナムの高校生のみなさんを招聘させていただきました。本日は中国とベトナムの高等教育事情に詳しいお二人をお招きしています。ご紹介させていただきます。

まず、中国についてご講演いただくのは、広告社株式会社、北京事務所所長の鮑（ホウ）碩（セキ）さんです。鮑さんは、天津外国語大学のご出身です。学生時代に日本語スピーチコンテスト全国大会で優勝されていますので、日本語はペラペラだと思います。広告社にお入りになったあと、中国での留学希望者向けのイベントや、短期留学のアテンドなど、多くの留学関連の業務に携わっていらっしゃいます。

続きまして、ベトナムについてご講演いただきますのは、Nguyen Minh Loi（グエン・ミン・ロイ）さんです。Loiさんは、現在、Loi Nguyen Trading Service社の代表を務めていらっしゃいます。出身大学は、ハノイ国家大学外国語大学で、日本の熊本学園大学や名古屋外国語大学の留学経験もお持ちです。これまでの経歴は、ハノイ国家大学外国語大学の講師を経て、現在に至っておられます。大変ベトナムの学校事情に精通されていて、今も日本の学校との交流に尽くされていると伺っております。

これから講演に移ります。最初に中国です。鮑さん、よろしくお願いいたします。

## 第1部 基調講演

### 「グローバル化するアジアの大学 中国・ベトナム」

## 基調講演

### 「中国の教育事情」

鮑 碩 氏

（広告社株式会社 北京事務所所長）

広告社、北京事務所の鮑と申します。よろしくお願いいたします。先ほど、佐藤理事の素晴らしい挨拶がありまして、私は感動しました。やはり留学関係の仕事をやっている、一番感じるのは、“自分が思ったルールが、この世界に共通したルールではない”ということで、とても大切だと思います。

たぶんこれからみなさんは、いろんな国の留学生と接する機会が多くなると思います。もちろん、留学生は日本に来て、日本のルールや日本の文化をちゃんと勉強しないといけないと思いますが、いろんな国にそれぞれの文化と習慣がありますので、それを理解したうえで、仕事をしたら多分スムーズだと思います。

私は基本的に中国の北京にいますが、これから中国の教育事情についてみなさんに紹介

したいと思います。

## 基本情報 1

これは中国の地図ですが、面積は約960万平方キロメートルで、東西の距離が5,200キロ、南北が5,500キロという、大きな国です。行政は23の省と4つの直轄市です。直轄市は北京と、上海、天津と重慶があります。ちなみに、私の故郷は天津です。そして、2つの特別行政区が、香港、マカオです。5つの自治区がありまして、チベットや、新疆などです。

中国から日本への距離ですが、北京や上海は東京まで飛行機でだいたい3時間です。広州はちょっと南なのですが、4.5時間くらいです。この下に、北京、上海、広州、大連の写真があって、街の雰囲気がわかります。実際に行くと、大都会の場合は東京や大阪とあまり変わりがないと思います。ただ、中国は広いので沿海部の方は、経済が発展していて、都会はきれいに見えるのですが、内陸に移動すると、まだかなり貧しいところが多いです。私は旅行で、新疆のウイグル自治区や、もっと山の中に行っているのですが、まだ電気も水もないところもあります。やはり、そのぐらいの差があるということを理解いただけたらと思います。

## 基本情報 2

このような人口の線があるのです。この人口の線の下部分は全体の面積でいうと43%です。こちらは57%なのですが、人口の94%がこの線の下にあります。人口はだいたいこの辺に集中しているという意味です。政府の統計で、人口は13億6782万人と言っていますが、実際には田舎に統計ができない人口もいると思いますので、全体で14億か15億ぐらいいると思います。

大学生の数は2468万人くらいいます。年間700万人以上の大学卒業者が出ます。一方、高校3年生の数ですが、毎年進学しようとしている高校3年生の数は750万人くらいです。

経済が年々発展しているのですが、例えば上

海や北京、この表を見ると分かるのですが、だいたいの月の収入ですが、上海の場合は14,000元くらいです。今のレートからいうと、日本円で27万円くらいです。でも、下へ行くと寧夏とか青海は6,000元しかなく、倍ぐらい違います。

例えば北京の場合は、13,000元ですが、本当にみんなが13,000元もらっているのかというのもあります。みなさん、ご存知のように、中国は格差があります。すごくお金を持っている人もいるし、あまりもらっていない人もいます。平均したら、13,000元になるのですが、よく、最近の中国の冗談で「平均された」と被害者気分で言う人がいるのです。

## 教育システム

中国の教育システムですが、日本とは大きな変わりはありません。義務教育があつて、小学校6年、中学校3年です。あとは中等教育で高校3年、高等教育の大学が4年です。中学校を卒業して、高校に進学できない、あるいは、学力が足りない時には、中等職業学校があります。高校を卒業して、大学に進学する学力、あるいは学費が払えないというケースもありますので、その場合は高等職業学校へ進学することもあります。

昔、中国はずっと学歴社会という感じでした。学歴に対する考え方としては、ものすごく高学歴の方が就職しやすいし、初任給も高いというイメージなのですが、最近は大学を卒業する人がなかなか就職先が見つからないケースがあります。逆に、高等職業学校、日本でいうと専門学校に近いと思いますが、そこを卒業したら、何か確実に技術、テクニクを持っていると、就職しやすいということもあります。

## 進学制度や試験

中国は戸籍制度があります。自分の生まれたところに戸籍があり、他の町や他の省に移動することが簡単ではありません。だいたい、戸籍所属の地域にそれぞれの学校があり、義務教育の

段階は戸籍所屬地域の学校に入るのが基本的です。

例えば、親が仕事の関係で他の省へ行った場合は、子どもは親のいるところの学校に入学することができるのですが、その場合は、「借読（ジエドゥ）」という中国の言い方がありますが、とても稀なケースです。

中学校から高校に進学する場合は、日本で言ういわゆる「受験戦争」のように、みんなが勉強して非常に競争が激しいです。この受験戦争は、だいたい、中学から高校に進学する時からスタートします。やはり、優秀な高校に入学したら、将来的に大学に進学するのも、問題ないという考え方を持っていますし、一生懸命勉強して、希望の学校に出願して、それで合格したら、その高校に入れます。

大学の場合は、全国の統一試験があります。その統一試験の成績によって、どの大学に入るかを決めます。でも、各大学の合格点は、学生の所属の都市によって、ちょっと変わります。例えば、北京の大学であれば、北京に住んでいる学生たちは、わりと点数が低くても入れますが、山東省の学生が、同じ北京の大学に入るには、北京の学生よりも高い点数を取らなければいけないのです。そういう制度があります。

それから、大学の出願は、統一試験が終わって、成績の発表が出る前に出願します。試験問題の正解を政府が発表しますので、だいたい自分は何点なのかを予測し、その点数に基づいて、大学の出願をします。また、一部の都市では、テストの成績が分かってから、どの大学を選ぶかを決めます。

日本は4月入学ですが、中国はアメリカと同じ9月に新学期がスタートします。前半と後半があり、9月は新学期が始まって、1月の中旬ぐらいで期末テストをやって冬休みに入ります。その時に、中国で一番大きなイベントの旧正月があり、春節休みをします。

春節が終わって、2月下旬か3月上旬で、次の学期が始まります。旧暦ですから、確実に、

“2月の何日”というのがなく、毎年毎年、微妙に違います。

後半が終わってから、7月ぐらいで期末テストがあって、この学期が終わります。夏休みに入って、9月にまた、新学期がスタートします。この夏休みや冬休みの期間ですが、中国の場合、北に行けば行くほど、冬休みの期間が長く、南へ行けば行くほど、夏休みの期間が長いという傾向があります。

## 高等教育機関数

ここに表がありますが、どの省にどんな高等教育機関がどれだけあるのか、大学とか、私立も公立も含めて書いてあります。全国で合計2,845校の高等教育機関があります。毎年の大学の卒業生の数も出ています。2013年までには、約700万人の卒業生が出ています。

それだけの卒業生が出ていますから、就職は社会問題になっています。日本も同じだと思うのですが、大学本科、4年制大学を卒業した人たちの就職率は約65%です。その代り、大学院の就職率は、約84%です。やはり学歴社会で、高いところに行けば、就職しやすいということです。また、先ほど紹介したように、専科生——専門学校のようなところの学生——は、約78%が就職できるというデータがあります。

## 中国大学の国際交流

場所にもよりますが、先ほど地図で見ていたように、沿海部のように特に経済の発展しているところは、積極的に外国の大学と交流するケースが多いです。また、学長と上層部担当者の判断で、重点的に交流する相手国——日本と交流するのか、アメリカとするのか——の選択などが左右されやすいです。例えば、この前、法政大学の先生と一緒に訪問した天津外国語大学ですが、その学長が元々日本語学部の学部長ですので、やはり日本を重点的に見えています。日本に対して親近感を持っているので、日本と積極的に交流するということです。

交流の内容は、この表に書いてあるようにいろいろな方法があります。「ダブルディグリー」がありまして、両方の大学で、2年間ずつ勉強して、両方の学位が取れます。しかし、問題点としては、勉強している内容が大学によって違いますし、それをどうやってお互いに単位を認めるかということです。

もう一つ、「3+1」があります。それは中国の大学で3年間勉強して、残りの1年は海外で勉強するということです。ただ、その場合は当然、海外の学位は取れないので、中国の学位だけを取ります。その場合は、交換留学生という制度を使って、「3+1」プログラムを扱う学生が多いです。問題点としては、海外の大学の学費と中国国内の学費は違いますので、だいたい相互、学費免除という条件で「3+1」をやりますが、その辺をどうするかというのも、学校間でちゃんと話さないといけないということです。

あとは、「短期研修」です。これは、夏休みや冬休みの時間を使って、学生たちは、10日間から1ヶ月の間で参加する短期プログラムです。文化体験もあるし、例えば法政大学に来て、模擬授業を受けて、周辺の企業も見学して、日本語も少し勉強して、ディズニーランドも遊びに行ったりするようなコースもあります。この問題点としては、誰がプログラムを作るのか、誰が学生を募集するのか、ということですが、最近割と多くなってきています。これは、国の関係によって参加者が大きく左右されます。

あとは、2つの大学の間で協定ができれば、「教師の相互派遣」などもあります。実際に教師の研修や、お互いに勉強に行ったりもします。

最後に「孔子学院」というのは、ご存知の方もいると思いますが、中国語と中国文化を宣伝する拠点として、中国の国が補助金を出して、海外の大学と一緒に孔子学院を作るケースもあります。日本にも数多くの孔子学院があります。ここに書いてありますように桜美林大学、北陸大学、早稲田大学とか、いろいろあります。

今でも中国の大学には、日本の大学と一緒に

孔子学院を作りたいという気持ちを持っている大学もあります。

## 中国人の海外留学について

実際には教育部——日本でいう文科省のような組織です——が、公開したデータは、2014年は計46万人海外へ留学している。そのうち、私費留学生は42万人で約92%の比率です。そのうち、日本への留学者は約5%です。一番人気のある留学先はアメリカで30%、イギリス、オーストラリア、カナダの順です。日本が約5%というのは、言葉の問題もあります。中国の小学校、中学校でも、全部英語をメインで勉強しているの、やはりアメリカや英語圏の国へ留学するのが便利ということもあります。

実際に人気のある国へ留学するときに、どんな学部学科を選択するのかというページです。国によって違いますが、一番人気は、中国語で「商業管理」というのですが、日本でいうと経済、経営という学部学科です。あとは、「商学」、または「エンジニア」などが選ばれています。私の感覚では、周りの留学希望者に「あなたは何を勉強したいのか」と聞くと、だいたいみんな、経済とか経営を勉強したいと答える人が多いと思います。

それなりに、みんなが経済、経営を勉強して、将来本当に就職できるのかという問題にもなっています。経済、経営を勉強して帰国してもなかなか勉強したものを活用できず、違う分野の仕事をしている人がかなり多いです。

## 留学関係の傾向（全体）

留学関係の傾向は、ここ数年のデータを見ると、若い人がどんどん海外へ行きたくなっているようです。昔はまだ、大学を卒業して留学するというケースが多いのですが、今はどんどん大学生の時代に留学します。ここ数年になると、高校生の段階でもう留学したいという人がかなりいます。

このグラフを見ると、海外の大学と中国国内

の高校と一緒に作る「国際クラス」というのがここ数年、多くなっています。「国際クラス」というのは、高校に入った時点から、もう海外留学を決めて、高校の教育内容は、中国の統一試験——先ほどの大学の入学の統一試験——の内容ではなくて、海外の大学に進学するための知識や学問を勉強します。当然、それを勉強したあとに、海外の大学に受験するときに有利になります。

ここ数年、北京でも、南京でも「国際クラス」の数が増えています。

一方、それなりに留学に行っているのも、帰国する人も増えています。下のグラフを見ると、2013年では、38万人くらいの留学生が中国に戻るといことです。昔——15年くらい前は、留学してキラキラしているというか、帰国して、“この人エリートだ”と思われて、就職しやすい時代があったのですが、ここ数年は、“留学しても大したことじゃない”と思っている人が少なくないです。企業にとっても、留学して就職に有利なことがあるかという、そうでもないということが、ここ数年ありました。

### 留学関係の傾向（日本留学）

先ほど、アメリカ留学とか、イギリスとか、カナダと言っているのですが、日本はどうかというと、やはりまだ大学院留学のニーズがかなり強いです。その理由を考えると、日本語を勉強し始めるのが、だいたい大学に入ってからです。大学に入って、日本語学部に入って、日本語を4年間勉強して、“日本は面白そうだな”と思って、次、留学するというと、やはり大学院になるのです。

もう一つは、大学生が卒業した後で、“もう一度、留学に行きたい”と考えている人もいます。しかも、日本ではちょっと考えられないかもしれませんが、大卒でもう一度、日本の専門学校に入るケースもあります。特別な技術を学べば、これから就職しやすいということと、プラス、自分の大学の学歴も持っているので就

職に有利になると考えている人もいます。

実際、私の周りにも同級生ではないですが、そのような友達もいます。大学卒業してから日本の専門学校に入るとか、あるいは、中国で実際に卒業して就職したが、仕事を辞めてもう一度留学するというケースもあります。

最近、ここ数年の中国国内の日本語学部の学生は減少傾向になっています。私が取材に行っている、日本語学部のある中国のいろんな大学の先生も、ほとんどみんな、そう言っています。定員割れまではいかないですが、募集が難しくなるとか、希望者が減少しているというのです。

その理由は、日本の経済の関係もあります。元々中国国内で日系企業はたくさんあるのですが、例えば人件費が高くなっているため等、いろいろな事情で撤退する企業もあるので、親が心配するのです。子どもが日本語を勉強して、将来、就職できるのかという心配です。それよりも英語を勉強した方が全世界どこへでも行けるのではないかという考えを持っている人は少なくないです。

若い人たちが日本に対して、興味がないということではないのです。ソフトパワーというか、日本の漫画とか、ファッションとか、その影響を受けて、「それ、好きだな」と思っている人は多いのですが、「それは将来の自分の仕事につながるか」と、親に言われます。やはり、親は心配して「日本はやめて、他の国にしてください。好きだったら、趣味としてやってください」という感じの人がかなり多いのです。

### 留学仲介会社について

中国国内の留学の仲介会社——エージェンシーです——について、話したいと思います。留学市場は、先ほどのグラフにもありますように、年々留学生が増えていて、大きな市場になっています。それに伴い、仲介業者も増えています。利益を求めるために、元々、留学条件を満たさない学生に対して、偽造書類を作って留学させるというような問題も多々ありました。



報道されて、問題になり、今は政府の教育部が留学市場を正規化するために、各留学エージェントにライセンスを発行しています。国が認めるエージェンシーであるということです。その社名は、教育部のホームページで全部発表されています。もし、留学エージェンシーからの紹介であれば、仲介業者がちゃんとライセンスを持っているかどうかを確認したほうがいいと思います。

ここ数年、一つ問題になっているのは、今、留学の紹介会社はすでに、500社以上もあります。国の教育部としては、“新しいエージェンシーを作る——これ以上、ライセンスを発行する——必要はないだろう”という考えを持っているので、新規でライセンスを発行するのは非常に難しいのです。それでも、この業種でやりたい人はまだいるので、その場合はどうするかというと、既にライセンスを持っている留学の仲介会社から、年間でいくらというふうに、ライセンスをレンタルするという業者もいます。それは気を付けてください。

それから、留学の仲介業者が日本の大学だけではなくて、大学院にも、日本語学校にも紹介します。だいたい、学生から紹介料をもらうのが基本的に彼らのビジネスですが、紹介する教育機関によって、もらう金額が違うのです。だいたい日本語学校の場合は、8千元程度、日本円で約16万円です。大学の場合は1万5千元、30万円くらい、大学院の場合は70万円までもらうケースがあります。また、日本語学校に紹介した場合には、日本の日本語学校から謝礼のようなものを10万～15万円くらい仲介会社に支払うという仕組みになっています。

大学院の場合は、なぜそんなに高いのかというと、教育システムが若干違いますので、学生たちは日本の大学院へ行きたくても、どういう仕組みで、どういうふうに入ったらいいのか分かりません。特に、日本の場合は、研究計画書などを求められるので、作り方やフォーマットが分からないと仲介会社に相談します。会社に

はたぶん留学経験やそのようなノウハウを持っている人たちがいて、“研究計画書はこういうふうに作ったら、留学しやすいでしょう”というアドバイスをしてくれます。

それは別に問題ないのですが、問題になるのは——私が調べた範囲で、ですが——、その学生の代わりに、研究計画書を作るということです。要するに、“別にあなたは何も書かなくていいです。そこの大学に行きたいのなら、私が書いてあげます”ということです。当然、綺麗な文章で作って、フォーマットも綺麗ですし、日本の教授の方がそれを見て、「ああ、いい学生だな」と思って、実際OK入れたら、“違う”というケースもあります。ですから、そういう書類選考だけではなくて、実際に機会があれば学生さんと直接会って、あるいはスカイプでもいいのですが、ネットで会って、実際に話をした方がいいと思います。

## 実感情報

私の実感情報——自分の感覚——ですが、まずは、中国の大学と高校の先生の留学についての考え方についてです。

大学の場合は、海外の大学と協定を結んだ上で、自分の学生が海外に留学するとか、あるいは、自分の大学を卒業してから、海外の大学院へ進学するとか、それは特に抵抗感はなく、逆に応援する立場であるということです。

しかし、高校の場合は、先ほど言いました国際クラス以外の、いわゆる中国の一般的な高校へ取材すると、「高校教育の目的としては、自分の学生を海外の有名な大学へ進学させるというのが教育の目的ではありません」と。「中国国内の一流大学——北京大学とか、清華大学のようなところ——に進学させるのが高校教育の目的です」ということです。けれども、海外の知名度が高くブランドのある大学の方がもし来たら、相談次第で推薦校などの体制を慎重に作るかもしれません。高校を卒業した段階で学生を海外の大学に進学させるということは、でき

ないことはないですが、慎重な体制を取っているということです。

保護者の留学に対する意識についてです。中国の経済がまだ発展していない頃は、“留学してキラキラして帰ってくるのがみんなの憧れ”で、留学はお金がかかるので、高嶺の花という感じでした。最近では、経済発展に伴って、みんな豊かになって、留学も一般の家庭でもできるようになりました。

しかし、海外の行先、どこへ留学に行っているのかというのが問われます。みんな冷静になっているのです。昔は、「留学できればいいや」という感じでしたが、最近では、どこに留学して何を勉強したらいいのかというのを慎重に見るのです。

昔、教育部でも報道されたのですが、他の国の名前も聞いたことがない大学へ行っても——日本ではないです——、実はあまりよくない大学で、結局は卒業できずに中国にそのまま戻ってきて、問題になったというケースもあります。

最近ではみんな慎重に、情報収集したうえで留学の行き先を選ぶ傾向になっています。

日本の留学の情報源というのは、まず一つは、みんなが日本語を教えてもらっている先生から情報を聞きます。どちらかというと、身内の人という感じで、しかも先生ですから、先生の言った情報は割と信憑性が高いと考えています。それから、自分がインターネットで検索して、大学のホームページを見ます。留学のポータルサイトもあって、いろいろ情報がありますので、そこから情報収集します。次は留学のエージェント、先ほど出ました仲介会社です。仲介会社へ行って、留学したいのですが、どこかいい大学はありませんかという話を相談に行きます。

その条件が合えば、自分の友だちや先輩、お兄さんなど、まわりの留学経験者に「どうですか」と、話を聞くのも一つの方法です。

## 日本語教育について

次のページは、中国国内の日本語教育につい

てです。中国は人口もそれなりにいますので、世界で一番日本語を勉強している人数が多い国です。

ここで見る通り、大半が真ん中の緑の部分ですが、高等教育、つまり大学に入ってから大学の日本語学部とかで日本語を勉強するケースが多いです。実際に、学生さんたちにいろいろ取材してみましたが、やはり日本語専攻の学生はその他専攻の学生より日本への留学希望が強いのです。これは当然な話ですが、実際に——小さい規模ですが——アンケートをしてみると、日本語学部の学生の約8割が、ちょっと日本へ留学に行ってみたいという気持ちを持っています。逆に、英語学部とか、他の学部の学生に聞いてみたら、「日本留学ってあまりピンとこない」し、実際に留学したいと思っている人も1割にもならないのが現状です。

全国の高等教育機関の中に、大学本科（4年）で日本語学部を開設している所は466校で、英語（935校）の次に、語学といえば日本語になっています。

大学の学部はたくさんあるのですが、英語、計算科学と技術、芸術デザイン、マーケティングなどの学部があり、全体的に見ると日本語という学部は第12位です。

## 各地日本語教育機関数（高等教育）

中国は広いので、これは、省や直轄市などの各地にある日本語学部を開設している大学の数です。北京が23、天津が16、河北省22、地域ごとに、どのくらいの大学が日本語をやっているのかという表です。各地で日本語を勉強する人がかなり多いです。遼寧省や、特に大連の方は日系企業も多く、そこで日本語を勉強したら、就職できるだろうと考えている人が多いので、日本語を勉強する人がそれなりに多いです。天津市も開発区の方にはトヨタとかありますので、日本語を勉強したら、何らかのかたちで就職できると考えています。これはやはり、経済の発展や、その地域の日本企業の数とか、その地域

の日本人の数にも影響されています。

## 対中国のグローバル展開①

これはあくまでも自分の考えですが、対中国についてのグローバル展開についてです。まずは「量」というか、数です。どうやって増やしたらいいのかということになると、

- ① 大学間交流協定を結ぶ学校数を増やしたほうが今後、定期的に交換留学生とか、ダブルディグリーで来られることができるので、その数を増やした方がいいのではないかと考えています。
- ② 国際クラスの高校、あるいは一般高校にちゃんと話を持って行って相談すれば、現地の入学推薦指定校数のような制度を作って、高校から学生を推薦してもらうということも考えられると思っています。
- ③ それほど数は多くないですが、信頼ができる仲介会社です。推薦をもらうということです。
- ④ 他には、夏休みや冬休みの短期留学プログラムです。その短期留学の数も、一応留学の数としてカウントされますので、一番手っ取り早くというか、簡単にできる項目の一つとして、法政大学に来る短期留学プログラムを、先ほどお話しにありました「さくらサイエンス」のようなかたちで、高校3年生の人が来るとか、高校生ではなくても例えば大学生が夏休みの期間で10人とか20人で一緒に来てここで短期交流するというのがあります。

「量」だけではなくて、レベルの高い学生——法政大学も優秀な日本の名門大学ですから——、単純に数だけではなくて、「質」も大事だと思います。

まず、先ほどの①の交流協定なのですが、最近の中国の大学のホームページを見ると、交流協定を持っている大学がたくさんあります。たぶん、日本の大学も10とか20とか並んでいます。実際に先生に聞いてみたら、交流協定

を持っている学校と何をしていたのかというと、当時は、調印して作っていたのですが、最近あまり動いていないケースがかなり多いようです。紙だけではなくて、実際に何か活動したいと中国の学校は思っています。

交換留学や現地の高校の推薦もそうですが、推薦された学生のレベルを——実際に入学してきた学生を——みて、“この学校はたぶん大丈夫だ”、“この学校の学生はちょっとレベルが足りない”というところを見て、来年は交流協定をどうするか、毎年検討が必要だと思います。

あとは推薦だけではなくて、もちろんですが、留学生に対する筆記試験とか面接とか、実際にその人に会って話をして、大丈夫かどうか確認することも考えられます。

先ほど、そこに短期留学と書いてありますが、実際には短期留学の学生がこっちに来て、2週間とか3週間、模擬授業を受けます。短期留学に来た学生の中に、もしかして長期留学でまた来ると、考えている学生がいるかもしれませんし、その模擬授業をしている間に、「この子はちゃんと授業を聴いているんだな」、あるいは「この子は法政大学に大丈夫だな」というのも、一つの面接の方法ではないかと考えています。

あとは、実際に留学生が来たら、「サポート」がとても大事です。

- ① 在学中のフォロー、留学に来て、日本で将来的に就職したいなら、その就職活動の手伝いなどです。
- ② そして、やはり中国はものすごく大学のブランド力というか、有名かどうかを見ますので、全中国でそのような、展示会とか説明会など、実際に学校訪問して説明するとか、学校のブランド力を作るということです。
- ③ 今、あるかどうか分からないのですが、現地で実際に問い合わせがあると思うのです。例えば、法政に留学行きたいのですが、誰に連絡したらいいのかということもあって、日本に国際電話をかけなくても、現地の相

談窓口が学校としてあればいいと思います。

- ④ 最後は、留学した後のOB会など、その資源を活用して、また新たな展開ができるかと思います。

## 対中国のグローバル展開②

ここは、先ほども話しましたように、やはり日本語を勉強した人たちが日本留学希望が強いので、その人たちに対して力を入れたほうが効率的だと思います。

あとは、学校間の交流をするときに、先ほどお話したように、上の方がかなり権限を持っている方が多いですので、そのキーマンを把握することが大事です。

3番目は、知名度やランキングを見ますので、それをどういう形で海外で宣伝するのか。それで、みんなに“ああ、いい大学だ”と思われるようなかたちを作ればいいと思います。

ここでの話ですが、早稲田大学と慶應義塾大学という、日本ではあまり変わらないぐらいのレベルですが、中国へ行くと、認知度は断然に早稲田の方が上なのです。早稲田と東大が同じぐらいだろうと、日本に詳しくない中国人は思っています。たぶん、中国の昔の偉い方が早稲田へ留学したことがあるということも影響していると思うのですが、やはり十数年前から頻繁に早稲田が中国国内で活動しているということもあります。

私が高校時代の時にも——二十数年前の話ですが——、その時も早稲田がうちの高校まで来ています。高校を卒業したら、うちの大学でやりませんかという話もきています。ですから、そのように積極的に動くのもかなり大事だと思います。

あとは、交流校から学生を受け入れるだけでなく、教員の相互派遣も受け入れることが必要だと思います。

長期留学以外に、短期留学などを開発して、交流する頻度を増加させることです。

最後は、最近の日本の若者はひきこもりが多

くて、あまり海外へ行きたくないという人がかなり多いと聞いています。しかし、もちろん積極的な人もいますので、そういう学生さんたちを集めて受入れるだけではなく、短期間でも長期間でもどちらでもいいのですが、海外の学校へ送って、海外の学生と交流するとか、海外留学にするというのが大事かと思います。

## 英語コースについて

この前、一緒に上海周辺を回ってきたときに、「法政大学はこれから、英語のコースを作る」という話を聞いて、いろいろ取材しました。これに関しての私の考えを書きました。

TOEFLやTOEICの成績を参考にするとか、見るというのは今のルールなのですが、中国の高校生は、あまりTOEFLやTOEICのためにわざわざ勉強することがありません。アメリカやイギリスに留学しようと思えば、それを勉強しますが、普通に中国の大学に進学する場合はその成績は必要ないし、受験も元々忙しいので——決して、彼らが英語能力がないというわけではなくて、その試験のために勉強したら、それなりに成績は高くなりますが——、今の高校生たちは一般的にその勉強はしません。根本的にその試験の成績が高かったら欧米留学にする人が少なくないです。しかし、“英語だけで、日本留学を考えている人はいないのか”ときくと、そうでもなく、考えている人もいます。

全ての人がみな、日本語学部に入っているわけではないですし、大学に入ってから日本の漫画を読み始めて、日本のファッションなどに魅了されて、“日本面白いな”と思っている人はいますし、他の学部に入っていて、日本語の勉強をしていないのですが、それでも日本に留学したいと考えている人はいます。その人たちに対しては、英語コースが妥当かと思うし、英語で実際に単位が取れるのですが、実際に生活すると日本で生活する以上、日本語ができないと、いろいろと生活上不便なことがあります。その辺を大学はどう、フォローするのかというのも

一つの問題点だと思います。

私の知っている日本のある大学は、中国と交流していて、交流協定を持っています。もちろん、学生もお互いに交換していて、中国の教員も受け入れています。しかし、英語コースの学生さんもそうですが、教員も全く日本語が話せません。それで彼らは、最初は基本的な日本語教育をします。もちろん、中国語を話せる日本語の先生がいれば、学生に授業ができますが、学生たちは全く日本語がわからないし、こちらは日本語しか話せないのも教育するのはとても難しいし、不便なこともあるそうです。

せっかく、交流協定があるのなら、先生方を1年間に1名か2名、呼んで、その1名、2名が学生たちの面倒をみるというのも、一つの方法ではないかと思っています。以上です。ご清聴ありがとうございました。

## 司会

鮑さん、ありがとうございました。

続きまして、ベトナムに関して、Loiさんよろしく願いいたします。

### 基調講演

#### 「ベトナムの教育事情」

Nguyen Minh Loi 氏

(元ハノイ国家大学外国語大学専任講師)

みなさん、こんにちは。「Xin chào (シンチャオ)」ご存知でしょうか。ベトナム語の「Xin chào」朝もお昼も夜も同じ挨拶です。ベトナムから参りましたLoiと申します。よろしく願いいたします。これから、ベトナムの教育事情について、少しお話させていただきます。

ベトナム料理が最近日本で流行っているとお聞きしますが、みなさんはベトナムってどんなイメージを持っていच्छゃいますか。私を見て、ベトナム人だと思いますか。日本人に見えるとよく言われますが、100%ベトナム人です。

ベトナムは中国と東南アジアの混ざった国

とされています。文化だけではなく、たぶん、人も混ざった結果だと思います。教育についても、中国から一番影響されているのですが、100年間以上、フランスの植民地だったので、文字や教育・思考などはヨーロッパの影響を大きく受けています。

## 教育システムに関する概要

ご覧のように、ベトナムの教育システムに関する簡単な概要です。

ベトナムの学校制度は、5-4-3-4です。小学校は5年、中学校は4年、高校は3年、大学が4年、短期大学が2年か3年です。小学校と中学校は義務教育ですが、小学校は基本的には、学費が無料です。しかし、中学校は学費がかかるので、学費が払えず、中1か中2でやめる人も結構多いという現状です。

ベトナムの小学校、中学校、高校という呼び方は日本と違って、日本は「小1」、「小2」…と、呼びますが、ベトナムは1～12まで数えます。例えば、小学校1年生だったら、「1年」。高校3年生は「12年」という呼び方です。

学期も日本と違って、たぶん中国やヨーロッパに近いと思います。新学期はだいたい9月5日で、毎年決まっている入学式です。また、Tết (テト) という旧正月もありますので、旧正月の日によりちによって2学期の始まりは毎年多少変わります。

これは、2013年のベトナムの就学率です。たぶん、日本ではあまり想像できないと思いますが、今のベトナムの就学率、96% (小学校) というのは、努力した結果なのです。長く戦争があったため、なかなか学校へ行けない地域もありました。特に、少数民族です。ベトナムは53の民族があります。私はその中で、京族または越族と言ってもいいのですが、その他は52の少数民族がいます。そして、識字率は93%となっています。

## 現行の学校教育体系

今現在のベトナムの学校教育体系ですが、日本と同じで6歳になったら小学校に入り、18歳で高校を卒業します。それから大学、大学院に進学という感じです。

本日の話は、主にベトナムの高校、大学を中心にしていきたいと思います。

これはベトナムの教育訓練省で、日本の文部科学省と同じ役割をするところです。2013年の統計による学校数、あるいは学生数、講師数などです。

## 高校と大学の状況

今現在、全国で207の大学がありまして、国立と私立の割合には大きな差があります。大学の年間の日程も普通の教育と同じく9月から新学期が始まり、6月に終わります。だいたい、ベトナムは暑い国と知られていますが、夏休みが一番長いのです。旧正月は2週間の休みがあって、夏休みは丸々3ヶ月あります。

私が講師になった理由というのも、夏休みが長くたくさん遊べるからということでした。私は日本語の講師でした。

ベトナムはご存知のように細長い国ですが、大学、高校、あるいは、短期大学などの教育機関は、主に、ハノイ、ダナン、ホーチミンに集中しています。ハノイは首都で、ホーチミンは経済的に一番発展している都市です。ダナンは中部の中心都市です。

一方、山側や海側の地域、カンボジアに接している地域には、大学はまだありません。高校も非常に数が限られていて、ほとんどの人は、中学校教育までですが、中学校教育まで受けたら、素晴らしいことだとベトナム人は思っています。

ベトナムでは義務教育が終わると、必ず中学校の修了試験を受けなければなりません。その修了試験を受けたあと、また、高校に入るための試験があります。最近は——ここ5年ほど前

から——、高校は統一試験となっていますが、それ以前は、全国の高校でそれぞれ独自の入試問題で行っていました。

大学入試も同じで、最近、統一試験になりましたが、その他に、各大学——特に一流大学——でそれぞれの審査試験を受けなければなりません。また、今年2015年からは、教育訓練省（前述の日本の文部科学省のような機関）が新たな試験方法を実施しました。ちょうど1ヶ月ほど前のことですが、大学の統一入試が今年から廃止されて、高校の修了試験の結果に基づいた大学選抜となりました。1つの大学に入るために、学生は希望の4つの大学に願書を出せるのですが、その大学から最終発表される点数を見るまでは結果が分からないので、みんな非常に不安な状態になり各地で混乱が起きています。これからのベトナムの入試、特に大学の入試はどうなっていくのかという大きな課題が残りました。

## 大学について

ベトナムの大学ランキングは、国立と私立ではっきり分けられています。

国立の方は、各省というイメージですが、一番有名な大学はベトナム国家大学ハノイ校です。次は、ベトナム国家大学ホーチミン市校。こちらに書いてありますように、国家大学というのは直接政府に属しており、教育訓練省の所管ではありません。その次は、カントー大学です。カントー（Cần Thơ）というのはメコンデルタの方の地名です。

国家大学は直接政府に属しているので、その予算も政府から直接受けます。国家大学は現在7大学ですが、国家大学の所長というのは政府の大臣と同じ役割で、すべてを決定できる権利を持っています。

一方、政府に属していない、または教育訓練省の所管の大学は、教育訓練大臣が権利を持っています。

ベトナムの大学の国立と私立の学費も差があ

ります。日本円に換算すると、国立大学は年間、2万5千円ぐらいです。近年は高くなってきて、私の学生時代の15年くらい前は5千円くらいでした。私立大学は、約2倍の4万5千円くらいです。

## 社会主義国の大学の特徴

みなさんもお存知のように、ベトナムは社会主義国家ということで、大学も教育制度も非常に影響されています。大学の特徴として、こちらにいくつか挙げています。

まず、大学あるいは教育機関が様々な省庁に所管されています。というのは、教育訓練省以外、それから国家大のように政府に所管されている以外は、各省庁に直接管理されています。

例えば、ハノイ法科大学は法司省に、建築大学といえば、建設省に直接所管されていて、その大学自体の規則などは、教育訓練省にも、直接管理されている省庁にも従わなければいけません。そのために、喧嘩になる場合もあります。

2つ目として、今、ベトナム政府は各大学に、一定の基準——「研究志向」、「実践志向」、「応用志向」という3つのカテゴリー——に基づいて、予算を配分しています。これは何かというと、もし3つのカテゴリー以外の大学の設立、あるいは学部を作る場合は、許可をもらえないということです。

3つ目は、ベトナムでは共産党や政府の管理が非常に厳しいので、各大学の理事や運営委員——ベトナムで言えば学長たち——は、共産党員でないといけないという事実があります。大学の職員や教員たちは、年間定期的に政治理論、あるいはホーチミン思想という勉強会を受けなければいけません。もちろん、学生たちも普通の科目、専攻の科目以外は、政治理論、あるいは軍事訓練を受けなければいけない状況です。

最近、社会主義国家だからこそ、発展や時代に遅れているということを政府も意識していて、近年、国際化が強く推奨されています。これに伴い、大学もグローバル化になってきています。

## 大学のグローバル化

ここ10年ぐらい、「共同教育課程」が非常に流行っています。この共同教育というのは、先ほどの鮑さんと同じく、ダブルディグリー以外は3+1、あるいは、各大学との共同研究がよく行われています。

しかし、この共同教育課程の一つの特徴としては、ベトナムはみなさんもお存知のように経済的に他の国と比べてよくないので、この共同教育は、例えばダブルディグリーの場合、国内の学費と海外に行くときの学費は非常に差が出ていて、その場合、学生は自費で、学校からの支援も受けないとほとんどこの共同教育はできないという状況です。

つい最近、5、6年前、政府によって外資100%の大学の設立が認められました。今、現在、例えばオーストラリアの経営マネジメントのRMIT大学が一番人気です。このような外資大学というのは、その大学のカリキュラム、あるいは運営システムなどをそのままその国から持ってきています。学費も外国の大学と変わりません。RMIT大学の学費は、だいたい年間100万円ぐらいです。ベトナムの大学の学費はだいたい2万円ぐらいですが、その大学に希望する学生は年々増えています。5年経って今現在、2000人の学生が在学しているそうです。

それから、外国投資家と国内投資家の合併による大学の設立も最近認定されています。昨年、ハノイ校と日本のODAによって、越日大学が設立されることになりました。その大学ができたら、今後のベトナムの教育状況が大きく変わるだろうと予想しています。

また、さまざまな国際交流プログラムも、各大学で行っています。そのようなプログラムはほとんど交換留学生のかたちです。なぜかという、先ほど申し上げたように、学生たちが自分から海外にインターンシップ、あるいは海外に研修に行くための旅費を出すのは非常に大変なことで、ほとんど交換留学生というかたちが

一番多いのです。

## 留学状況

こちらは、教育訓練省による2013年の留学統計です。今現在、49ヵ国にて、10万人くらいの留学生という数字です。これから年々、もっと増えていくという予測ですが、その中で私費留学は90%以上です。一番人気の留学先は、オーストラリア、その次はアメリカ、15%です。この表では、日本留学はたった4%しかありません。

## 戦略パートナーといった日本

日本とベトナムの友好関係は、昨年でちょうど40周年になりましたが、教育の交流などは、まだまだ手つかずという状況だと思います。その中で、最近ベトナムは日本に対して戦略パートナーとみています。教育においての特徴をご紹介します。

まず、日本語教育です。日本語教育は、ベトナムと日本の関係はまだ40周年にしかかっていないのですが、実際に日本語教育は1943年から開始されていました。その時はちょうど戦争で、日本軍が入ってきて、ベトナム人対象だけではなく、アメリカ人対象の日本語教育も行っていたのです。60年～70年経って、今、日本語教育は全国で、大学だけでなく、高校、最近では中学校にまで普及されています。中学校の日本語教育は、2003年に日本の国際交流基金のプロジェクトで行われていて、今は全国で15校くらい行っています。

それから、日本の学校との国際関係は、先ほど申し上げたように、日本との留学促進、あるいは日本の大学との交換プログラム、インターンシップ、交換留学生、職員交換プログラムなども、最近非常に活発になっています。

日本への留学というのは、大学留学そして大学院留学もありますが、それは、先ほども申し上げましたように90%以上は私費留学です。

国費留学は非常に少なく、奨学金をいただけ

る学生たちは非常に頭が良いのですが、最近の問題も起こっています。国から奨学金をいただいて、日本に留学して、卒業したあとは国に帰らずに、日本に残って働く人が非常に増えているという問題です。

## 日本の大学に求めるアプローチ

このような事情の中で、日本の大学に求めるアプローチはいくつか考えられると思います。

まず、一つは「社会主義国の大学の特徴の理解」です。先ほど申し上げたように、各大学はさまざまな省庁に所管されているので、その大学自体だけではなく、教育訓練省だけではなく、省庁との関係づくりというのがとても大事なのです。

次は「日本への留学促進」、スキームあるいは促進するための工夫、配慮などが必要だと思います。今、日本に留学するための情報を、ほとんどの学生たちは主にインターネットを通じて、あるいは先輩を通じて得ています。しかし、今後ベトナムで、例えば“学生はここに行けば情報が得られる”という所があれば、非常に良いと思います。これに関しては、広告社によって、今年からハノイにあるVJCCというJICAのプロジェクトで人材育成促進センターの中で、広告社事務所を作ることになっていて、是非、日本の各大学がそこを活用して、日本への留学を促進できればいいと思っています。

日本の大学とベトナムの大学の関係を強化することが大事だと思いますが、私の経験では、必要な時に、説明会などを行って、もし結果がなければ、しばらくは連絡ややり取りがないという大学もあるので、それはとても残念だと思います。これからのグローバル化の中では、改善していったほうがいいのではないかと思います。それ以外は、先ほど佐藤先生のお話を聴いて、私の頭の中で一つ思いついたのは、各大学は、その点は線にならないと意味がないだろうと思います。2つの大学、1つの線では、グローバル化とは言えないと思います。ですから、



その線と線は、たくさん作らなければいけないと今強く思っています。そのたくさんの面ができると、きっとグローバル化、あるいは地球となるはずだと思います。

本日、この短時間で、私の話とその一つの点となるといいなと思います。みなさん、ご清聴ありがとうございました。

## 司会

Loiさん、ありがとうございました。

### 第2部 学務部職員研修会 全員参加によるワークショップ

第2部は職員研修の為、掲載省略